

豊見城市立豊見城中学校（校長 砂川芳之助）

【読み聞かせボランティア、図書館司書と連携した平和学習の取り組み】

（平成 28 年 6 月 現地取材）

《実践事例紹介》

I 読み聞かせボランティア「豊見城中学校 虹の会」

「平和はずっと続くわけではない。もと（戦争）に戻ることもあるんだよ」

〔読み聞かせ当日の活動について〕

読み聞かせ当日は、朝 8 時に、学校図書館に集合している。

8 : 00 ~ それぞれの近況報告や雑談を通して、会員同士の輪を確認している感じがした。図書館司書から記録用ファイルが配布され、世話役（坂口さん）からは、割り当て学級の確認がおこなわれた。

8 : 10 ~ 割り当て学級に図書委員会所属の生徒が図書館集合。図書館司書が支援し、図書委員会の生徒と会員が割り当て学級へ移動。



8 : 15 ~ 8 : 30

読み聞かせ実施。会員各自で準備した絵本にて読み聞かせをしている。平和学習月間をふまえ、沖縄戦に関連した絵本となっている。会員によっては、体験談を語る方、新聞記事を活用する方もいた。



（集合時の様子）

（顔合わせの一コマ）



《3年生の学級での読みかせ》

『今日、読み聞かせを聞いて、戦争は本当におそろしいものだと思いました。人を人じゃなくし、平気で人を殺し、家族を殺さないといけない。しかも、人が死んでいくのを目の前で見ないといけない。家族とはなればなれになる。それが一番辛いことだと思いました。だから、これからは一生戦争がなくなってほしいと思います。』

～生徒感想より～

8 : 30 ~ 9 : 00 図書館にて記録用ファイルに反省事項を記入。その後は、読み聞かせを通して気づいたことや近々の話題などを思い思いに語りあう姿がみられた。それぞれ仕事をお持ちの方もおり、急ぎ出勤する方もいた。





《読み聞かせボランティア》 「豊見城中学校 虹の会」

隣接の小学校で読み聞かせをしていた保護者により立ち上げ。小学校での読み聞かせの成果をふまえ、その延長として位置付け。結成当初は、保護者のみでの活動であった。会員の不足もあり、保護者以外にも会員枠を広げ現在に至る。現在の会員は、10名程。近隣小中学校の読み聞かせを掛け持ちしている方も多い。

今年度は8回実施予定。(写真左は、世話役 坂口悦子さん)

〔会員との情報交換〕

Q 6月の平和学習月間をふまえ、どのようなテーマ・想いで読み聞かせを行いましたか？

(会員)「個人的には『戦争と子ども』をテーマにしました。当時の子どもたちが体験したことを伝えながらですが、一方では、現在の生活のなか

(読み聞かせが終わって。後方窓際「沖縄戦特設コーナー」)



にも、例えば、いじめや貧困といった『戦争』が存在していることにも気づかせていきたいと思います。」 「体験者が少なくなっている中で、私たちが、いかに体験者の思いを伝えていけるか、伝えなければいけないかを考えながら、読み聞かせをしています。」

「当時の地元がどのような状況だったかを、しっかりと伝えていかなければと。豊見城城跡周辺は、当時の軍の病院壕がありましたよね。以前、遺骨収集を行った際には、手術で切断されたと思われる腕の遺骨も見つかりました。遺骨収集が続いている。だから、現在でも、戦争は続いていると感じている。」



Q 体験者による継承について

(会員)「実際に何があったかを知るには、やはり、体験者から直接聞くことが大切。地元の体験者にも話を聞いて記録することが大切では。」 「体験者でも、当時の体験を話す人もいれば、まったく口を閉ざす人もいる。集団自決のことを話しているのは、男の人が多くでしょう。女の人、母親で、実際に我が子を手にかけた(殺めた)人は、みんな黙っている。(お腹を痛めて生んだ我が子を母親自らが)手にかけた時の感触が残っているからさ。今でも、みんな苦しんでいる。体験者の中にも、そんな方もいるから、傷ついた心の中に土足で踏み込むようなこと(むやみに体

験談を引き出そうとすること)は、できるはずないさ。」 「PTSD でした？ 沖縄戦体験者で、当時の事がトラウマとなって、精神的に苦しんでいる方が多いって。」 「ここ数年、沖縄戦体験者の PTSD について認知が広がっていますね。」 「当時の悲惨な状況を体験者が話すことについては、体験者同士でもいろんな意見がある。昔のことを、むやみに掘り起こさなくてもいいさという考えの人もある。」 「体験者から、当時のこと聞きたいが、今の話のようなこともある。聞き手も気をつけないといけない。」

Q 平和学習をする機会、学校側への要望などは？

(会員)「地元の戦跡めぐりが、やはり大切では。体験者が少なくなる中、当時の様子を伝える場として、その保存や活用がもっと重視されてもいい。」 「やっぱり、学校での平和学習も大切では。私も、家で子どもたちに沖縄戦について話をする機会を持ちたいと考えているけど、なかなかできない。そんな時、学校で、図書館を活用した沖縄戦コーナーを設置したり、講話を行ってくれることは、親として本当にありがたいと率直に思っている。」 「若手の先生方と勉強会を持ちたいですね。色んな資料を持ち寄って、もっと沖縄戦について勉強する必要があると思います。」



Q 中学生へ、どのようなメッセージを送りたいですか？

(会員)「私は、『いまは、平和かもしれない。でも、平和はずっと続くわけではない。元に(戦争に)戻ることだってあるんだよ』って、話しています。だから、『今、何が起きているのかよく考えなさい』って。」 「『6月は平和学習』っていうような、年中行事になってはいけません。(次の世代の)『語り部』になって、継承してほしいです。」

II 平和教育担当 崎濱秀昭教諭 インタビュー

崎濱教諭は、同校赴任 1 年目。社会科ということもあり、さっそく平和教育担当となっている。崎濱教諭曰く「手探り」の中で、同校の平和教育の取りまとめ役になっている。

Q 平和教育担当としてどのように取り組んでいるか？

(崎濱)「赴任 1 年目ということで、どのような流れで企画・実施をしていいかまったく加減が分からないのが現状です。とくに大規模校ということもあり、平和集会ひとつ取っても、複数の担当者がいるため、スムーズな連携をどう図っていくかが課題と感じます。平和教育担当として、沖縄県平和祈念資料館から証言ビデオを借用した。各学級での利活用がしやすいように、貸し出し表を作って、図書館カウンターにて貸し出しができるようにした。ただ、多忙な先生方にどこまで声かけをしたらいいか、悩んでいるのが現状。学校全体、学年全体で平和学習に取り組むことを考えると、必然的に、学級活動や道徳の



時間の活用となる。しかし、学級活動は、すでに年間計画の中で実施すべき内容がほぼ確定しており、学級担任の裁量でできる時間の確保が難しい。かといって、道徳の時間を活用するとすると……。いろいろ調整が難しいと感じている。」

Q 先生個人としては、どのような思いを持って平和学習に取り組んでいるか。

(崎濱)「社会科でもあるので、沖縄戦について、自分なりに『これだけは絶対に伝えたい』というポイントが三つあります。

一つ目は、『6月23日』についての誤認を正すこと。意外と多くの生徒が『6月23日』を、沖縄戦が終わった日と誤認している。大人にも誤認している人がいる。実際には、その後こそ、悲惨さも増しているの、沖縄戦が公式に終結したのは、実際には『9月7日』であることを伝えたい。

二つ目は、沖縄戦や沖縄戦に至るまでの過程について「あの戦争はやらなければいけなかった。だから仕方なかったんだ」という見方が増えつつあるなかで、一歩立ち止まって、「それでも、本当に戦争をやってもよかったのか？」と、子どもたちに問いかけること。今、もし当時と同じ状況に陥った時に、戦争を選択しない解決策もあったのではないかと、考えさせたい。

三つ目は、沖縄戦の特徴について、しっかりと理解させること。残念ながら、地元の人間よりも、本土から来て出会った人の方が、沖縄戦についてよく知っていることがある。とても恥ずかしいと感じる。生徒たちに、沖縄戦の特徴についてしっかりと伝えたい。生徒たちが、大人になって、その時に会う人たちに対して、地元の歴史をしっかりと語ることができるように、しっかりと伝えていきたい。

最近気になることは、戦争を美化するような風潮があること。そうさせないためにも、沖縄戦について語る時には、概要を伝えることも大切だが、体験者から聞いた話やエピソードを交えて、実際に現場はどうだったのかを伝えるように心がけている。」

右写真は、同教諭が図書館カウンターに設置した沖縄県平和祈念資料館の貸し出しビデオを活用したコーナー。学級ごとに貸し出し予約をおこなうようになっている。



Ⅲ 学校司書としての取り組み



仲本麻美司書も、赴任1年目。高い評価を受けている同校の読書活動実践、読み聞かせボランティア活動を支える立場となった。これまで同校が積み上げてきた実践をふまつつも、教諭自身の思い描く図書館経営のイメージを練っている最中とのこと。右写真の



ように、手狭なスペースを工夫しながら、「沖縄戦特設コーナー」を設置した。

800名を超える大規模校の割には、蔵書数が少なく、スペースも手狭であるのが課題であると同司書。

前任から引き継いだ資料を利用して、中学生と同年代であった「鉄血勤皇隊・通信隊」、「ひめゆり学徒隊」の資料を展示。クイズ形式の展示資料とあわせて、生徒用ワークシートを作成し、学習内容の理解を深めるよう工夫している。沖縄戦写真パネルも、以前、寄贈された資料を大切に保管、利活用していた。



～ 「沖縄戦平和学習」今後のシェアリングのために ～
『校内平和学習の拠点としての図書館経営の可能性』

今回のシェアリングプロジェクトでは、豊見城市立豊見城中学校における平和学習月間の取り組みを取材した。読み聞かせボランティア「虹の会」会員による取り組み、平和教育担当、図書館司書それぞれの取り組みから感じたことは、図書館の利活用を念頭に各担当が互いに連携することで、図書館が学校における平和学習の拠点となり得るということである。

図書館には、地元の資料も備えられている。沖縄戦関係だけでも、沖縄県教育委員会による「沖縄戦研究」、豊見城市編纂の「豊見城村史 第6巻 戦争編」などの公刊物もあり、同校の沖縄戦特設コーナーに閲覧資料として活用されていた。普段、読まれることが少ない地元の資料であるが、生徒だけでなく職員にも閲覧機会を与えることになる。体験者による継承が困難になりつつあるなか、地元の資料から沖縄戦当時の状況を掘り起こし見つめ直すことが、これからの平和学習ではより一層重視されると指摘されている。地元資料を備えた図書館を拠点に、校内における平和学習の在り方を再構築していく。同校の取り組みから、平和学習の将来像がかすかに見えたような気がした。

赴任1年目の平和教育担当、図書館司書を中心に、「虹の会」の皆さんや各担当が連携した取り組みに期待したい。取材協力をいただいた砂川芳之助校長先生、「虹の会」会員、崎濱先生、仲本先生、事前調整でご尽力いただいた図書館教育担当の外間先生、その他関係者の皆様、心より感謝申し上げます。

(沖縄県平和祈念資料館 古謝将史)